ニュー・ジーランド・マオリの冥界神話と説話——『記』・『紀』黄泉国神話と対比して——

井上英明

I

日本の天地開闢神話や黄泉国神話のモチーフが南太平洋ポリネシアの、とくにニュー・ジーランドにおけるマオリの伝承した創世神話のそれと密接な類縁関係にあることはもはや学界の常識にさえなっている。前者のパァターンがローランド・ディクソンの言うポリネシア系創世神話の「系図型又は進化型」と「創造型」(1)との接合による複合型であると考えた松本信広氏の説(2)は、現在ほとんど定説化しているといってよいであろうし、後者とマオリ人の冥界神話や地方説話にみられる重要な神話的モチーフ、たとえば、二神の離反が人間の死の起源の説明になっていることや、「黄泉戸喫（よもつへぐひ）」（『記』）・「飡泉之竈（『紀』）」といったタブーが存在することも、今日すでに動かしえない事実であるにいってよい(3)。もとよりわれわれもこうした視点によるマオリ神話・伝説との類似関係そのものについては異存があるわけではなく、ことに天地開闢神話のパァターンがマオリの創世神話と同型だとする説は、ほぼ全面的に認めてよいと思う。しかし、イザナキ・イザナミの黄泉国神話をめぐって取り沙汰にされて来たマオリの冥界神話や説話に関しては、なお若干の検討の余地が残されているように思われる。というのもマオリ人の伝えた冥界の神話や説話が必ずしも人間の死の起源のみを意味し、ただちに「ヨモツヘグヒ」のタブーばかりを語るものではなく、そこにはまた別個の重要な神話的動機がかなり劇的に語られており、そうした神話的動機もまたこの際大いに強調されてしかるべきだと考えるからである。

小論の主な目的の一つは最近に至るまで日本人学者を含める欧米の学者によって引き合いに出されて来たマオリ神話と説話の冥界に関する部分が必ずしも本来の形姿を伝えたものであるとはかぎらないゆえんを結果的には明示することにあるのだが、本稿では(A)イザナキ・イザナミ両神の黄泉国神話に対比される部分と、(B)「ヨモツヘグヒ」のタブーに対比さる箇所とを、本拠地ニュー・ジーランドの学者によってなされた最近の研究によって、かれこれ比較検討してみたいのである。われわれの依拠するテクストがマオリの創世神話ではアントニー・アルパーズの近業にかかる『マオリ神話と部族伝説』(4)であり、「ヨモツヘグヒ」のタブーに関する説話では、マ

ーガレット・オーベルの『対訳マオリ説話』(5)であるのは、この両文献が私見の及ぶかぎり、マオリ伝説と説話の本源に迫った、もっとも新しい成果を示し得ているものと思われるからである。

II

まず、マオリ文学の側からみた場合、(A)の部分はタネ Tane とヒネ・ヌイ・テ・ポ Hine-nui-te-po をめぐる純粋な神話Mythology に属し、(B)に相当する部分は『冥界から連れ戻された女』(Ko Pare râua ko Hutu)と題された説話folktaleに類するもので、両者は明らかに発生の地盤を異にしているものと推察される。そこで日本で(A)に相当する部分ははじめに松本信広氏によって(6)、最近では大林太良氏によって(7)、イザナキ・イザナミ二神の離婚、つまりマオリ神話の方ではヒネとヒネ・チタマ（ヒネ・ヌイ・テ・ポは冥界での名である）の離反による死の起源神話の解釈としてもっぱら引かれているのだが、それはこのタネとヒネ・チタマの物語を冥界神話そのものに限定し、その結果的部分のみを際立てて主張する限りにおいて至当な解釈であるにすぎない。マオリの創世神話ではイザナミに相当するヒネ・チタマがなにゆえに冥界に赴き、そこでの女主人公・夜の女神、ヒネ・ヌイ・テ・ポにならなければならなかったかに叙述のウェートがあるように思われる。アントニー・アルパーズが再構成したマオリ神話の創世記にあたる部分を初めから読んでいくと、タネという神はランギ（天）とパパ（大地）の生んだ多勢の子供たちの一人で、最後の独神（ヒトリガミ）として登場して来る。しかもこのタネにはイザナキにはすでに免除されていた女人創造という大業があった。多くの独神のうちこのタネが初めて欲望に目覚め、妻を求める、というようより、男と女とから成る一対の完全な人間を創ろうと企てるのである。タネはタラカワという所でとれた赤土で女の形を作り、その鼻孔に『旧約聖書』の創世紀的なテクニックを用いて命の息を吹き込み、ヒネ・アフという土製の女を作り上げ、これを妻にする。ヒネ・アフはタネとの間に「夜明の女」とよばれるヒネ・チタマを生む。ヒネ・チタマは成人して美しい女になる。タネはこれも妻にし、いく人かの娘を彼女に生ませる。マオリの創世神話はここから急に陰鬱な悲劇的色調を帯びて来る。太古の人間に避けられなかった近親相姦が、ここでは恥辱と原罪の明白な意識となって、ヒネ・チタマをさいなむ。しかもマオリ神話の特徴はこの父と娘の相姦を悪として、あるいは恥辱として一身に引き受けるのが、男性のタネではなく、彼の娘であり、妻であり、子供たちにとっては母親であるところの、ヒネ・チタマ、すなわち「夜明の女」その人なのである。マオリ神話での原罪は母であり、妻であるところの女性がすべて引き受けるのである。

—ある日、ヒネ・チタマは夫のタネに自分の父親は誰であるかと尋ねた。タネは答えず、「家の柱に聞いてみよ」と言った。彼女は真実を悟った。ヒネ・チタマが夫とばかり思っていた男は実は自分の父親であった。この事実を知った時、彼女は白日の世界、テ・アオを去り、暗黒の世界、テ・ポに隠棲しようとただちに決意した。「おお、タネ、私にはもうわかっているのです。私を辱しめたのはあなたでしたのね。私はおばあさまのパパ（大地）の所へ逃げて行きます。私の通る路は下界への通路としていつも作らせておき、私はその下界に永住します。」そう言って彼女がラロ

ヘンガという所へ行くと、そこで死の通路が作られた。爾来、人間はそこを絶え間なく通うことになったのである。ヒネ・チタマは強力な呪文を唱えて自分の子供たちを深い眠りに陥れ、タネが後を追って来れないように彼を衰弱させておいてから下界の入口に赴いた。彼女はそこで門番のクワタワタに出遭った。クワタワタは何処へ行くのかと尋ねた。彼女が答えると、「引き返しなされい。あまり遅くならないうちに。御許の背後にはあらゆる光と悦びとがあるが、御許の行手は亡霊の世界ですぞ」といった。しかし、ヒネ・チタマは、「いいえ、もどりませぬ。私は上界に住む私の子供たちを守るために、未知の国、ラロヘンガに行くのです」と答えた——。

従来の研究者の多くはマオリの冥界神話のうち、なぜかこの部分を引き合いに出さなかった。あるいは出したにしても、その中の重要な神話的内容はあたかも無視されたかのように、非常に簡単に、しかも誤って要約されすぎた憾みがある。たとえば、松本信広氏では、「タネが、のち土で、女ヒネをつくり、之と婚し、人間の祖となる。ヒネは自分の由来を知り、怒り去つて地下界へ行く……」(8)というふうに紹介されているが、これではタネと彼が作ったヒネ・アフとはいわば正常な結婚であるにすぎず、タネがこのヒネ・アフという妻に生ませた娘のヒネ・チタマと父娘相姦の罪を犯すという事実が出ていないのであり、松村武雄氏では、「タネ(Tane)が土で一女人を作り、これと結婚してヒネ(Hine-tau-ira)を産み、成長するを待って、之をも妻とした。ヒネはその事情を知ると、恥ずかしさに自殺して冥界に赴き……」(9)とあり、父子相姦の恥辱は出ているが、二三の点でやはりもの足りない。まず、タネの娘の名は、Hine-titama、別名をHine-ata-uriaと呼ぶのが正しい(10)。つぎに近親相姦の事実をヒネは何によって知ったか、松村武雄氏なら当然問題にしたはずの「家の柱」が出ていない。さらにヒネは自殺したとある。しかし、どうもこの自殺という行為は父子相姦という深刻な事実に耐え得なかったこの神話そのものの採集者による合理化ではなかったかという公算が強い。われわれの依拠するテクストでは自殺という事実はどこにも存在せず、ヒネ・チタマはただ激しい恥辱と自己嫌悪の情によって冥界に赴くのである。それではなにゆえにかかる異同が生じたかというと、それは松本・松村両氏の責任ではなく、両氏の引く文献それ自体にある種の限界があったとみる他はない。両氏が依拠した出典はそれぞれ自注に明記されているごとく、つぎの三書である。すなわち、エルスドン・ベスト『マオリ宗教と神話』(一九二四)(11)、J・F・H・ウォラーズ『ニュー・ジーランドにおけるマオリの神話と伝説』(一八七四)(12)、J・ホワィト『マオリ古代史—その神話と伝説』第一巻(一八八六)(13)。このベスト、ウォラーズ、ホワィトの三者のうち真のマオリの伝承に近い意味で信用できるのは時代的に最も古いウォラーズのものだけである。しかし、今日マオリ神話・伝説・説話の集大成として量的に最も充実し、多くの研究者による利用度がすこぶる高いのは、なんといっても一八八六年から一八八九年にかけて出版されたホワィトの『古代マオリ史・その神話と伝説』全六巻である。そしてこのホワィトの六巻本におけるマオリ神話・伝説の資料は、当時の大英帝国の植民地ニュー・ジーランドに十九世紀の前半期に渡航して布教活動を行なったキリスト教宣教師、リチャード・テイラー、ウィリアム・コレン

ソ、それに右のウォラーズの採集した稿本からとられている。しかも、ホワィトはマオリの信仰・習俗を説明する特別の目的のために、それらの稿本の内容を自分の都合のいいように書き変えている。そうした事実はすでに後の研究者によって気づかれているのだが、徹底的に出典を洗ったのはプライツ・ヨハンセンで、彼の研究によると(14)、ホワィトはニュー・ジーランドの初代長官ジョージ・グレー卿の歴史的著作、『マオリの祖先たちの功業』"Ko Nga Mahinga a Nga Tapuna Maori" からも多く取り入れ、しかもその内容をこれまた自己流に変更していることが判明している。グレーのこの本は一八五四年、ロンドンで出たもので、神話や伝説のマオリ語による最初のコレクション(15)であるが、それらはすべてマオリの首長か高僧の口述を記録したものか、あるいは首長などによって書かれた写本から編さんされたものであることになっている。この本の英訳は翌年ジョン・マレーによって、"Polynesian Mythology and Ancient Traditional History of the New Zealand Race, as furnished by their chiefs and priests" という長いタイトルをつけて出版され、爾来、本書は学者の校訂をうけつつ版を重ねるのであるが、グレーのマオリ語と英語によるこの二冊の書物こそは散文によるマオリ神話の第一資料とつねにみなされ、今日、マオリ神話英訳本の古典として世界の読書界に非常な権威をもって君臨したのである。また、神話・伝説・説話の採録者として、後代のいかなる研究者もグレー卿ほどの好運に恵まれ得なかったのは、主として採録の時期が一八五〇年以前であり、彼に資料を提供したマオリ人のほとんどがまだキリスト教徒になる以前の人間であったからである。ところがこのグレー卿でさえ自分の得た資料を私意によって改竄している事実がニュー・ジーランドのオークランド大学人類学学部のブルース・ビッグス教授によって明らかにされているのである。ビッグス教授はグレーの蒐集にかかるマオリの首長や僧侶の写本（これらは一九二三年以来、オークランド公立図書館所蔵となる）を検討した結果、グレーの刊行したテクストの内、五分の二が実際には彼の秘書を務めたマオリ人、Wi Maihi te Rangi Kaheke の著作であり、その部分に創世神話が入っていたことを指摘し、かつ、グレー自身がいかに性的なことに関する部分を削除し、さらにはマオリ人のナレターがキリスト教とヨーロッパ文化を知っているかもしれぬことを暗示するいくつかの句を故意に排除しているかを明確にしている(16)。そのことはグレーとほぼ同時期に非宣教師として神話・伝説の採集にあったエドワード・ショートランドが自分に他所ではみられなかった詳しい創世神話を語り聞かせたマオリのイフォーマントが後にキリスト教徒であることを告白したと自著に記していることからも当時の実情がしのばれるのである(17)。

ところで、ビッグス教授の言によれば、グレーのマオリ語本の精確・厳密な校訂は多くの歳月をかけねばならぬ大事業となるであろうということであるから、もとよりわれわれの関与できることではないが、ぜひここで言っておきたいのは、マオリ神話・伝説の根源本的資料として最も権威あるこのグレー本においてすら、筆者自身のヨーロッパ文化による改変の事実があり、ましてや後続のホワィトにはその事実がますます顕著であると同時に、現実に話を提供したマオリ人の精神構造の原初性という点からも、多くの問題を含んでいるということである。そして実は、今われわれが問題にしているタネ・マフタの女人創造やヒネ・チタマとの近親相姦やその恥辱

による彼女の冥界行きの神話がグレー本にはまったく見当らないのである。われわれの依拠するテクストの著者、アントニー・アルパーズの功績は、グレー本に削除された冥界神話の部分、あるいはその後の研究書に簡略に紹介されるにすぎなかったその部分を、主としてリチャード・テイラーの稿本によって付加し、マオリ創世神話の全体系をありし日のままに再現したことにあるといってよい。そこで話を前に戻し、タネ・マフタの冥界訪問の前半部にこの女性創造・父子相姦・原罪・冥府行きといった一連のストーリーを置くと、従来のイザナキ・イザナミの黄泉国神話との対比とはまた違った角度からの比較検討が要請されて来るのではあるまいか。まず第一にイザナキには女性創造という仕事はない。イザナギは男神、イザナミは女神として五組の男女対偶の神々の最後に出現する。第二にイザナキ・イザナミの結婚による国生み、島生み、神生みはオートマチックに連続的なものであり、結婚の目的は別天つ神の「是のただよへる国を修め理り成せ」（『記』）という上からの命令である。第三に、イザナミの黄泉国行きは、火の神を生んで焼かれたためである。そこにはヒネ・チタマのような原罪の意識は少しもない。ところがマオリ冥界神話の場合では、タネ・マフタという独神・男神が女性を創造して人間を生もうとするところにその出発点がある。しかも、当初から近親相姦の要素がきわめて濃密である。アルパーズ本が省略している箇所をいま、ショートランド本で補足すると(18)、タネが最初に妻にしようとした女性は母のパパ（大地）なのであった。母のパパは息子のタネを拒絶するために、タネにつぎつぎといまだ人格神ではない妻を紹介する。タネはそのいずれにも満足しない。母パパの紹介するマムハンゴ、ヒネ・チュ・ア・マウンガ、ランガホエ、ンガオレ、パコチ、といった妻はすべて人間を生むことに失敗したからである。そこで先に引いたように、タラワカ(19)の赤土で女の土人形を作ってこれと結婚するのは、母パパの最後の指図だったのである。タネがいずれの妻にも不満のまま帰って来るごとに新しい妻を紹介するパパの姿には息子との相姦を必死で避けようとする戦いのごとき意志がある。したがって、ヒネ・チタマが父親タネの娘妻 (daughter-wife) であったことに激しい恥辱を感じ、「おばあさまのパパ（大地）の所へ逃げて行きます」という言葉の背後にはこうした縦の血縁によるタブーが存在していたのである。そのかぎりにおいてマオリ神話はイザナキ・イザナミの黄泉国神話と決定的に相異する。どちらが古層に属するかの問題は現在のわれわれにはにわかに判定できない。しかし、こうした異質の構造にあって、マオリの冥界神話はなお一脈の『記』『紀』へのつながりがあるように思われる。それは最近、西郷信綱氏がほぼ確信をもって主張したイザナキ・イザナミの結婚が、じつは兄妹による相姦であったという事実である(20)。イザナキ・イザナミの創世神話とマオリの創人神話とが兄妹、父娘というちがいはあっても、同じく近親相姦というタブーを犯して成立したものであるならば、日本の天地開闢神話も世界の諸族のそれと同じく、きわめて古型を保っているのではあるまいか。つぎにヒネが近親相姦の事実を知るのは、夫（父親）のタネが「家の柱に聞いてみよ」ということによってである。そうするとこの柱はイザナキ・イザナミの両神が「行き廻り逢ひて、みとのまぐはひ」（『記』）を行った天の御柱に通じるものをもっている。柱はすでに指摘されているように、豊饒な生殖力を願ったファルスのシンボルとみてよいだろう。そしてタネとヒネ・チタマの相

姦も柱に対するこうした呪術的信仰を背景にして行なわれたので、家の柱がすべての秘密を知っていたのだとする推定も可能なのではないだろうか。

先に紹介した物語の最後はつぎのような結末になっている。

―ヒネは立ち去るとき、うしろを振り向くと、タネがあとを追って来るのをみた。タネは泣きながらやって来た。「タネ、帰って下さい！」と彼女は叫んだ。「白日の世界へ戻って私たちの子供を育てて下さい。やがて子供たちをこの下界へ集めるために私をここへとどまらせて下さい。」そう言い残すと、彼女は下界の入口を通り抜け、終りのない永遠の仕事にとりかかった。この時から彼女はヒネ・チタマという名を捨てて、ヒネ・ヌイ・テ・ポ、すなわち、偉大なるヒネ、あるいは偉大なる夜として知られた。毎日彼女のおかげであかつきの光は東から射し、西に沈んだ。そこでタネは彼女に従った。すべての人間は永久に彼女に従い、彼女の通った通路を通って来なければならなかった……。

これはやはり諸家の言う通り死の起源を説いた神話であるとみてよい。しかし、マオリの神話にはイザナキ・イザナミの黄泉国神話のような、冥界の醜悪な描写がない。ヨモツシコメによって追われるイザナキが物を投げて逃げる、いわゆる「呪的逃走」のモチーフもない。冥界と明界との境を「千引の石」で塞いでの「コトドワタシ」の事実もない。あるとすれば、『紀』の「絶妻之誓」ではなく、ここでは妻のヒネが夫に絶縁を言い渡す形式をとっている。また、他のポリネシア神話ならともかく、このマオリ神話に関するかぎり、「一日に千頭絞り殺さむ」とか、「一日に千五百産屋立てなむ」とかいう人間の生死をめぐっての言い争いもない。黄泉国の住人を見てはいけないとタブーも存在しない。ヒネ・チタマが「吾に恥見せつ」『記』と叫ぶのは、あくまでも現世明界における父子相姦の罪に対する恥なのである。タネが自分の娘を犯すというマオリ神話における原罪は、、アントニー・アルパーズが説くように(21)、イヴの罪のごとく人間の原罪を目的的に説いたものではない。この近親相姦は人間の生成と豊饒を願って企てられた結果であり、いわば生物学的に不可避のものであったといえる。そしてそれがこのような結末になったことに『記』・『紀』にはないマオリ神話の本質的な悲劇性を説く鍵があるように思われる。夜明けの女、タネの恥辱は深刻であり、しかもこの時の彼女の感情の急変にははかりしれない真実がひそんでいる。しかしマオリ神話ではヒネの永劫の贖罪がじつは全人類に恩恵を施すというふうに説かれている。彼女の恥辱の本質と贖罪の大きさは幾世代か後になって出現するマウイという人文的英雄神の醜悪な犯罪をよびおこす。マウイはこの夜の女神・夜明の女を犯すことによって不死身の希望を失なうのである。しかしこの神話を結果的に凝視し直すと、このマウイという英雄の死は刑罰といったものではなく、生誕のない死も、死のない生誕も、ともに人間にとっては不幸であり、人間において生と死という不可避の生物的な状態そのもののがじつは人間の幸福を約束するものであるという、マオリ人における世界解釈、ないしは人間そのものの意味であったといってよい。

Ⅲ

つぎに(B)に相当する部分、すなわち、「ヨモツヘグヒ」のタブーの例証としていくつかポリネシアの神話・伝説が引かれて来たのであるが、そのうちの一つが、松本・松村両氏の引く『冥界から連れ戻された女』である。松村氏によれば、「フツ (Hutu) という男がパレ (Pare) という女から結婚の申出を受け、之を拒んだので、女は縊れて死んだが、フツはその霊魂を取り戻すべく冥界には赴くこととし、夜の女神ヒネ・ヌイ・テ・ポに贈物をして教えを乞うと、夜の女神が冥界への路を教え、又食物を与えて、〈もし亡霊界の食物を口にすれば、この世界に帰ることが出来ないぞ〉と戒めた(22)」という内容で、依拠文献はゴドリントンのメラネジア神話に関する研究書(23)となっている。この物語はオークランド公立図書館所蔵のR・テイラーの稿本が最も原話に近く、ホワィトの著作中のこの物語の内容はテイラー本の改竄本であることが分っている。マーガレット・オーベルの忠実な翻刻によると、この物語はマオリ語で一千字前後の小篇であるが、一八六六年八月、ニュー・ジーランドのワイカトという地方で二年前から続いていた戦争で、重傷を負ったマオリの青年、ハリアタ (Hariata) からティラー自身が採録したものである(24)。内容の要約はほぼ松村氏のものでよいが、これはフツに対するパレの狂恋の物語で、いちじるしく現世的であり、神話的色彩はほとんどないのである。

今そのストリーをやや詳しくたどってみる。高貴な生まれのパレという女性は自分に匹敵する男性がいなかったのでながらく未婚のままでいた。そこへ現われたのがフツという妻子ある男性で、彼は矢投げの名人であった。たちまちパレはフツに魅せられた。たまたまフツの投げた矢が自分の家に飛んで来たのをチャンスに、パレはそれをとりに来たフツに矢を返そうとはせず、結婚を迫る。すでに妻子をもつフツはそれを理由に頑固に申し出を拒否する。しかしパレはフツの抜群の矢投げの技術のためになおも愛を告白する。フツはついに彼女の家を逃げ出す。フツが立ち去った後、パレは自殺する。以上が話の第一段である。第二段は、つぎのように続けられる。パレの自殺を知った彼女の親兄弟たちは嘆き悲しみ、フツも彼女の後を追って自殺すべきであると主張する。フツは親兄弟たちに、「自分は彼女の死を償うためによろこんで死ぬが、しかし、自分がここに戻るまで彼女の屍体を埋葬してはならぬ」と言いつけて、「精神の飛びはねる丘」Te Rerenga wairua にやってくる。フツはそこでヒネ・ヌイ・テ・ポに逢う。ヒネ・ヌイ・テ・ポはここではもはやずるがしこい女神になり変っている。そこで、はじめは別の道を教えようとする。人間の通る死者への通路を教えたのは、フツからグリーン・ストーンを受けとったからである。そこでフツのために食事を用意したヒネ・ヌイ・テ・ポがフツに言った正確な言葉は、つぎのようなものである。「あなたが冥界に着いたとき、これをあまり早く食べ終えてしまわないように、少しずつ召し上れ。あなたがこの食物を冥界で食べ尽すなら、あなたは二度とこの世には戻れませぬぞ」というものである。フツはこの言を守る。以上が第二段である。第三段は、フツがいかにしてパレを冥界から連れ戻すかにもっぱら叙述の中心がある。フツは冥界で彼女をおびきだすために、投げ矢とこまわしのデモンストレーションを行う。しかしパレは姿を現わさない。フツはつぎに高木にロープをまきつけ、パ

ネ仕掛けのブランコの作り方を冥界の人々に教える。これによるゲームでパレはやっと姿をあらわす。パレはこのゲームを非常に好んだので、フツはパレを自分の肩に乗せ、高木にとりつけられたブランコにつかまり、ロープで地上遠くにそれを弓なりに引っぱらせ、次の瞬間パッと離させる。パレとフツはその反動で冥界の入口のところまではねかえされ、それから二人は村に帰る。後から飛んで来たパレの霊魂が彼女の身体にたどり着いたとき、パレは再び息を吹き返す。彼女の親兄弟たちは大喜びし、重ねてフツにパレとの結婚を申し出る。そしてこの物語はつぎのように終る。

―フツは言った。「ぼくの妻と子供たちはどうなるの?」すると親兄弟たちは、「パレは君の第二夫人になるだろうよ。」フツはようやく納得したので、パレはパレ・フツとして知られるようになった。

これがはたして「ヨモツヘグヒ」の正しい例証として引き合いに出される内容のものであろうか。この説話の主題はフツという青年が自分への横恋慕のために勝手に自殺したパレという女性をいかにして冥界から連れ戻すかという点にある。そしてその主題の中心は、フツがパレを連れ戻すために用いたその技術のすばらしさにある。もとを正せばパレがフツに惚れたのも彼の技術に対してであった。そして、多くの研究者が注目する「ヨモツヘグヒ」のタブーはここではそうしたタブーの残滓だけがほの見えているにすぎない。われわれがその部分をあえて訳出して示したように、「ヨモツヘグヒ」は冥界の食物を一度口にしただけで現世には戻れないという性質のものである。それが他の諸族にみられる約束であり、この説話の中のそれもはじめはそうした固いタブーであったかもしれないが、ここでは少しずつ食べて、要するに食べ終らなければ現世に戻れるというふうにタブーそのものが軟化しているのである。また、ポリガミーのマオリ族にあって、フツが妻子あるをもって結婚を拒否することもおかしい。さらにオーベルも注意していることだが、ようやくフツが結婚を承知してパレを妻にすると、このパレは、フツ・パレ (Hutu-Pare) とよばれている。ニュー・ジーランドにヨーロッパ人が移住する前のマオリ社会では、妻が夫の名をこのように冠する習慣はない[25]。したがってこの説話は明らかにキリスト教徒となったマオリ人の創作とみてよい。ニュー・ジーランドにおける最初のキリスト教宣教師は、一八一四年、十二月二十二日にシドニーから渡来したサミュエル・マースデン (Samuel Marsden)で、ニュー・ジーランドにおいては一八二〇年代に入ってからますます布教活動はさかんになり、クリスチャン・マオリの数は急速に増えていく[26]。冥界神話の記憶も次第に遠のいて行く。われわれは『記』『紀』の「ヨモツヘグヒ」のマオリ神話の例証として、松本信広氏も引いているマタオラ (Mataora) の話の方がより適切ではなかろうかと考える。なぜなら、この話では、夫と妻が冥界から帰って来るとき、いれずみと織物についての知識を持ち帰るからであり、『記』『紀』のストリーと直接の関係はないが、あきらかにこれは文身・はた織の起源神話であるからである。またこの神話では明界・冥界の食物の区別は厳しく守られている。

結局、フツとパレの物語、『冥界から連れ戻された女』は冥界との交通という点を軸として外郭的にはギリシア神話のオルペウス型

に属するといえようが、その内容は神話的契機のあまりに稀薄なメルヘンであるといえる。

マオリ神話と伝説はかくして複雑な重層性をもっているのである。その完全な復原は、『記』『紀』の神話がそうであるように、不可能に近いといわれている。今日ニュー・ジーランドにおけるマオリの若者たちはもはやマオリ語を大学において学ぶのであり、グレーやアルバーズの英訳本によって自分たちの「祖先の功業」を知るのみである。（一九七二・一二・二五）

注

1 Roland B. Dixon, "Oceanic" in "The Mythology of All Races", 1916, PP. 5—36.

2 松本信広『日本神話の研究』（一九三一）一八六頁。

3 注2、二一四頁。松村武雄『日本神話の研究』第二巻、四二八頁。

4 Antony Alpers, "Maori Myths and Tribal Legends", 1964.

5 Margaret Orbell, "Maori folktales, texts in Maori & English", 1968.

6 松本『前掲書』二一八頁。

7 大林太良『日本神話の起源』一〇四頁。

8 注6に同じ。

9 松村『前掲書』四八三頁。

10 Bruce Biggs, "Maori Legend", in Encyclopaedia of New Zealand, 1967. P. 449.

11 Elsdon Best, "Maori Religion and Mythology, 1924, P. 80.

12 J. F. H. Wohlers, "Mythology and Tradition of the Maori in New Zealand institute, 1874, P. 9.

13 J. White, The Ancient History of the Maori, his Mythology and Traditions. (1886—89) Vol I, PP. 131, 136, 145. 以上松本・松村『前掲書』所載。

14 J. Prytz Johansen, "The Maori and Religion in its Non-ritualistic Aspect," 1954, PP. 273—83.

15 この前年、グレーは、"Nga Moteata" というタイトルで聖歌と歌謡のコレクションをニュー・ジーランドで出版している。

16 B. Biggs, "The Translation and Publishing of Maori Material in the Auckland Public Library," Journal of Polynesian Socity, VoL, 61, No3, No4, 1952.

17 E. Shortland, "Maori Religion and Mythology", 1882, P. Ⅷ.

18 注17、PP. 20—22.

19 注17の本では、"Kura-waka" となっている。P. Ⅷ.

20 西郷信綱「近親相姦の神話・イザナキ・イザナミの物語をめぐって」『展望』一三九号。なお、氏は二神の交りを近親相姦とみた最初の学者として、一八八三年（明十八）に『古事記』の英訳を出したチェンバレンをあげている。

21 注4の付録。

22 松村『前掲書』四二八頁。松本『前掲書』二一四頁。

23 松村『前掲書』四九〇頁の注の十一。R. H. Codrington, 1891, PP, 277, 286.

24 注5、P. 107. なお、オーベルによれば、ティラーはこの物語の英訳を一八七〇年に出しているが、マオリ語の原文はないとのこと。

25 注5、六頁の脚注。

26 G. L. Pearce, "The Story of Maori People, 1968, P. 46.